

## 第8回【野菜編（5）】

府立農事試験場ではウドの軟化栽培に関する試験研究は明治35（1902）年に始められました。その後、大正8（1919）年にはウドのほかにミツバやミョウガなどについても試験が始められました。これらの野菜が試験研究の課題に取上げられた背景には、当時の食文化として、これら野菜が料理の添え物としての需要が多かったことに関係しています。

東京の産業其一（農業）によれば、大正8年から大正15（1926）年までのウド、ミツバの生産事情をみると、ウドの生産額は北多摩郡や豊多摩郡で多く、作付面積は最も大きいときで74.1町歩（734千m<sup>2</sup>）ありました。ウドの栽培は露地栽培が主でしたが豊多摩郡の吉祥寺周辺では土窖（露地圃場に掘った小規模な穴倉）を使った軟化栽培が広がっていました。しかしながら、住宅地の拡大と連作障害が栽培に大きく影響しその面積は減少していきましました。ミツバの生産額は北豊島、荏原、南足立、南葛飾、南多摩郡の順に多く、作付面積が最も大きかったときでは121.9町歩（1,208千m<sup>2</sup>）でした。栽培形態は需要の増加と共に生産額の増加もみられ軟化栽培に促成技術を組み合わせた軟化促成栽培が増えました。これらの野菜のほかに添え物として需要が多かったものにシソがありました。シソの生産額は南葛飾郡で最も多く、金町、奥戸、水元では青葉の芽紫蘇を主に、南足立郡では穂紫蘇を促成品として出荷する促成栽培が増加する傾向にありました。

農総研にはウドの細密画が16点、シソが1点のほかアスパラガスが4点残されています。ここで紹介する細密画はそれらのうちの一部です。

明治35年に初めて行われたウドの軟化栽培は、土窖と日よけ藁を使って新芽を軟白化させる方法をとっていました。ミョウガやミツバもウドの軟化栽培と似た方法で同様の試験が行われました。アスパラガスの軟化栽培は3年目以降の若芽を土寄せする現在と同じ方法で軟白化させました。他方シソは促成栽培の試験が行われ、明治40（1907）年に建てられた木框フレーム（写真1）が使われました。シソは1月中旬に苗を定植したあと本葉6・7枚で抽苔させ6～9cmの花穂が咲く2月上旬から中旬にかけて収穫する促成品でした。

これら添え物野菜の軟化品や促成品の荷造りには、見た目を良くするための工夫がなされていました。シソは10本から15本を一把にして小麦稈で結束します。一把の中心は長めのシソを配置して円錐状になるようにします（図1）。図1の細密画には穂紫蘇のほかに露と菜豆（インゲンのこと）の促成品の荷造り姿が描かれています。菜豆は、50本ないし



写真1 木框フレーム（農事試験成績略報第十一より抜粋）



図1 穂紫蘇、露、菜豆の促成品

100本を一把にして青葉に包み荷造りされました。ウドは25本を一束として2列に並べて藁でしばられ荷造りされました。

#### 引用・参考資料

- ・東京府立農事試験場.農事試験成績略報：第二.
- ・東京府.東京府の産業（農業）其一園芸.昭和4年.p70-72,78-79.
- ・東京府立農事試験場.業務功程：大正8年度.
- ・東京府立農事試験場.芽紫蘇と穂紫蘇の促成栽培.園芸之友.昭和2年10月号.p516-518.
- ・高木輝治.吉祥寺の土當歸促成栽培.日本園芸雑誌.大正13年2月号.p46-49.

ウド、シソ、フキ、インゲン、アスパラガス細密画一覧（第8回）

細密画	品種名（読み仮名）	収穫期 （始－終）	細密画	品種名（読み仮名）	収穫期 （始－終）
	獨活 （ウド）	3月		右) 促成紫蘇 （そくせいしそ） 中央) 促成落 （そくせいふき） 左) 促成菜豆 （そくせいなまめ）	促成紫蘇）：2月上旬－ 中旬（12月下旬は種、 1月中旬定植） 促成落）：記録なし 促成菜豆）：12月上旬－ 1月上旬（9月上旬－10月 上旬のは種）、2月上 旬－4月上旬（12月上 旬－中旬のは種）、3月 下旬－5月上旬（1月上 旬－下旬のは種）
	赤芽 （アカメ）	3月（12月伏せ 込み）		根株	4・5月（は種翌年の3 月から4月に根株の定 植）
	與左エ門 （ヨザエモン）	3月（12月伏せ 込み）		アスパラガス2種と発 芽の状態並に花と實	4・5月（定植から3・ 4年目以降）
	半佐 （ハンザ）	3月（12月伏せ 込み）		アスパラガス	4・5月（定植から3・ 4年目以降）
	節赤 （フシアカ）	3月（12月伏せ 込み）		アスパラガス雌雄花と 實	4・5月（定植した翌年 の5・6月頃に開花、 7・8月に結実）
	庄兵衛 （ショウベエ）	3月（白独活： 2月伏せ込み）			